

## 28年度1学期終業式講話 「螢の里 日野小の子ども等に願う」

今日は、ホタルの話をしてします。

校長先生が子どもの頃の宮川は、ちょうどこんなようでした。そして、夏の夜にはよく螢が飛んだと言います。実は今年もあの宮川でけっこう螢が舞っていたのですよ。

でも、今年の中庭のホタル池にはかないません。凄かった。螢が大発生しましたね。

たぶん、多い日には千匹を超えるホタルが出たように思います。

今から30年近く前、皆さんのお父さんやお母さんが小学生の頃、中庭にホタル池が作られました。昔のように螢が飛ぶ美しい光景を皆さんに見せたくて、皆さんのおじいちゃんおばあちゃんたちくらいの方たちが作ったのです。

## なかにわのほたる



ホタルの光は、オスとメスの出会いの信号なのです。オスはおしりの先を強く弱く光らせながら、草や葉の上で弱く光っているメスをさがして飛びまわります。そしてメスを見つけ結婚します。長い場合は一晩中しっかりと抱き合っただけで離れません。それを交尾と言います。

そのために、全身の力を振り絞って1週間光り続けるのです。そして、草の陰に身をかくし、1週間ほど命の光りを放つ

と、死んでいくのです。

私たちが、「わあ、きれい」「宝石のよう」と言った螢の光は、螢の子孫を残すために灯された、新しい命を育む光りだったのです。

7月も半ばにさしかかると、イルミネーションのようにあれだけ光っていた螢がぼつんぼつんとして見られなくなっていきました。何か寂しい気持ちになりました。

ところが、実はもう、来年の夏、ホタル池に飛ぶホタルが育っているのです。

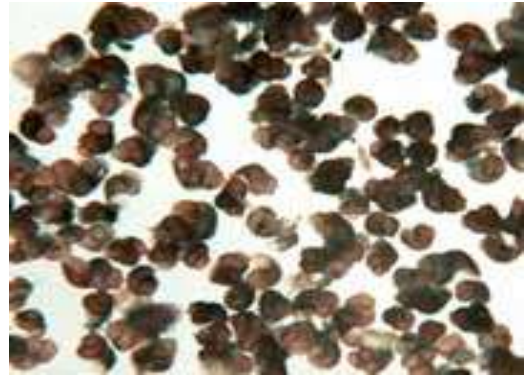
たぶん、卵から幼虫になってホタル池の土の



中で暮らしているはずです。

しかし、来年も今年のように螢が飛ぶという保障はないのです。今年あれだけの螢が飛んだのですから、たぶん何千個いや何万個という卵が産み付けられたと思います。その数だけ幼虫になると、莫大な数の餌、カワナが必要になります。

もしかすると、多くの幼虫は餌不足となり、春先サナギにはなれないかもしれません。今年のようには螢に成れないかもしれません。こんな螢が飛ぶ夏は、滅多にないのですから。



私たち人間は、螢のように光り輝くことはできないのでしょうか。

いや、そんなことはない。と校長先生は思います。

螢のように、目に見えませんが、光り輝くものを、皆さん一人ひとりが発しているのです。持っているのです。

目には見えない皆さん一人ひとりの光を見つけのは私たち先生の役目です。もしかしたらあなたの光に、友だちが気づいてくれるかもしれません。そして何よりもあなた自分自身が、その光を発し続けることです。

大丈夫、あなたにはあなたにしか照らすことができない光が、きっとあるはずですから。

いよいよ 明日から  
長い夏休みですね。  
おわります。

みんな もっている  
わたしだけの ひかり